

## 橡実庵一枝編『翁くさ集』

伊藤善隆  
(立正大学)

### 摘要

本誌十四号で翻刻紹介した『ひの川集』（安政五年刊、手銭美術館蔵）と同じ編者による『翁くさ集』（幻夢庵桃雅跋、安政七年刊、個人蔵）を翻刻紹介する。

キーワード…俳諧、橡実庵一枝、春星堂鶯宿、幻夢庵桃雅、半時庵淡々

### はじめに

橡実庵一枝編『翁くさ集』（安政七年刊、個人蔵）は、半時庵淡々の百回忌追善集である。一枝の経歴は未詳ながら、本書により、八千坊系の俳人であったことが明らかである。

口絵を描いた鶯宿は、大坂の俳人で、八木氏。梅室の門人で、此花庵、春星堂、方斎と号した。

すでに本誌十四号で『ひの川集』（一枝編、安政五年刊）を翻刻紹介したが、同書と共通して本書に入集する俳人が複数確認でき、安政期の中国地方の俳人たちの交流の様相を知る上でも重要な撰集である

ことから、ここに翻刻紹介する。

### 〈書誌〉

書型……半紙本一冊。二二、三cm×一五、六cm。袋綴じ。楮紙。  
表紙……青緑色地布目原表紙（後掲図版に見える斑点は汚れ）。  
題簽……原題簽。中央単辺。「翁くさ集」。

見返し……薄黄色料紙。「半時庵追福／翁艸集／橡実庵編」。

口絵……「心需鶯宿写「春星」（方印）」。

版式……無辺無界每半葉八行（本文）、無辺無界半葉九行（跋）。  
字高……一三、四五cm（一）ウ五行目「雲おこれく桃年」を計測。

丁付……柱に「一（〜十四）」（最終丁は丁付ナシ）。

奥書……「安政七申仲冬」。

跋……「幻夢庵主桃雅」。

丁数……全一五丁（本文一四丁、跋一丁）。

〔凡例〕

翻刻にあたり、句読点、濁点、半濁点を適宜補い、改行を適宜改めた。また、異体字は通行の字体に、片仮名は平仮名に適宜改めたが、一部に原本の書体を残した。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「」をつけ、（ ）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

底本（個人蔵）は虫損により解読困難の箇所があるため、富山県立図書館（志田文庫）蔵本を参照した（国文学研究資料館所蔵マイクロフィルムによる）。

参考のため、原本の図版を末尾に示した。

〔翻刻〕

翁くさ集

「（表紙）

半時庵追福

翁艸集

橡実庵編

「（表紙）  
見返し

（口絵）

二樹二石淡々老人植之

応需鶯宿写「春星」  
（方印刻）

半時庵淡々高源朝水居士

百廻忌追福脇起俳諧之連歌

世界栗我宿ばかり菊もがな

里のきぬたのさびしをり打

雲おこれか、れよとまで月澄て

油障子に雫するなり

切炭に火のうつる香も春なれや

寐ずに居た眼のさめる大ぶく

猿曳の貰ひためたるつゝみ銭

むかしにかはる今の堀川

ふいと出た廓なまりを咎られ

簞笥の鍵を大事がりけり

置そめてしばしゆるがぬ竹の雪

斜ながらに冴る月かけ

むしろ帆を棧子さすほど積重ね

多玖比参りに出立惣勢

国替の噂もいつかなくなりて

鷺の寐に行鳥崎の松

八重一重花に床几を置直し

たまり水からのぼる陽炎

土堤普請しさしたまゝに夏近く

牛の供養の鐘が鳴なり

芥火のぶすり〜と燃て居る

「（二）

一枝

桃年

米山

楨立

一瑞

其山

旭石

梅丸

芦丸

瓢窓

一嘯

芦半

江月

井旭

芦玉

閑遊

霍江  
女

鶴芝

露筵

清雅

「（三）

笠一枚で易き世わたり

合歡の木に並びて眠るものもなし

祈た雨の海へ逃ゆく

藁で掃畳の上の砂ほこり

おもはせぶりに貫ふ生ぬる

検校の娘いつしかうわきだち

夕部を咲る白粉の華

虫の音は次第に瘦て照す月

露の寒さが腸にしむ

木地盆に馴のつくのを樂しみに

塩屋のけぶり面白うたつ

箆持のこゆれば撓む小板ばし

搔上土に風の尾をひく

其影の香は百とせを慕ふ花

机に夢をむすぶあたゝか

初空やしづかに明るひがし山

吹こんで灰にも消ず玉あられ

水鳥の水をはなるゝ日の出哉

春風の吹とゞまるや潦

日最中の影たしかなる柳哉

強うふく風も見えけり糸柳

五月雨のはれ間を啼歎むら雀

雛立てやさしや蟹が有明し

はしり啼雉子や声より先に立

香月 〔(三)〕

潮柳

柯雪

弁奴

半山

富州

綾貫

藜々

普光坊 〔(三)〕

子剛

一圓

蘭和

花井

肖年

執筆

大和子剛

富州

和泉松子

月江

一器

其石

針柿玉

とく女 〔(四)〕

呉雲

金毘羅紀行の内

ちよつぱりと霞の海や真島山

貫ふたるたばこ味はふ日永かな

きのふけふ桜になるや竹箒

雉子なくや濃茶手前の仕舞比

凍どけや蒲公英一ツ畦の中

菜の花やひと日の旅も日に臥る

水垢のいつしかとれて草紅葉

太箸や持馴るほど気のゆるみ

御降や世は洗ふたるものゝ艶

声もたぬ松からはやき霞かな

海にまで重ねくもりやさくら鯛

本意なさや炉ふさぎ跡の両二日

華の夜や朧めきたる木の間の燈

手にむすぶ水に名のある柳かな

春雨や障子にくもる夕けぶり

はしる気の鴛にもあるか水明り

松杉に声を譲りて冬木立

蓬萊やけぶるほこりも新しき

鴉のきる浪筋のかぬ小春かな

引鴨や浮寐の夢の醒るとき

何してとおもふ日はなし松の内

啼さうな空幾夜さぞほとゝぎす

みじかくもなき夜すがらの衛哉

青林

其室

尺西

清風

一瓢

南溪

梅路

美作正蛙

鷗郎

柳叟

茶雄

備前几麗

備中嘯雨

笠村

一竹

嫩緑

緑漪

梅実

二川

備后梅臣

含桂

卜隣

風外

露萩

〔(五)〕

〔(五)〕

〔(四)〕

更ゆくやきぬたに冴る咄し声  
 跡の子にせかるゝ子あり筆始  
 黄鳥や斧の猶豫を啼かさね  
 大藪の片側つゝむ木槿かな  
 見さがりは人にもあるや初裕  
 朝かげや入江をへだつきじの声  
 しら露や種に残せしはゝき草  
 涼しさやたまに吹来る滝の音  
 笹にのみ夕日きらつく枯野かな  
 囀や風もふかぬにちる松葉  
 来た方は行衛もしらず初時雨  
 眼にたよる灯はなくなりて遠碓  
 しぐるゝや川浪つくる都鳥  
 数啼ど声のもつれぬ蛙かな  
 寒い日も旅人見るや春の風  
 へつらはぬ雨ふりこむや枯尾華  
 池の雨鴨はつくく眠りけり  
 山寺や蝶も来て居る花御堂  
 かれ芦に月も音する夜也けり  
 葉先迄這ふてからたつ螢かな  
 大雪の上に静な月夜かな  
 黄鳥や日あたりのよき滝の上  
 落尽ぬまつの古葉や秋のかぜ  
 柴舟の頻りに下りる小春かな  
 押水に明るき空や甫登藝数

露白  
 喜薫  
 柳岬  
 介草  
 雨川  
 青栞  
 桜脛  
 竹等  
 闇鷺  
 宗海讃岐  
 牧之阿波  
 淡室豊后  
 霍歩  
 蘇園  
 護三  
 米山伯耆  
 米原  
 孤郎  
 松下  
 溪風  
 月峯  
 竹雨  
 春人  
 春保  
 北池

「(七)

「(六)

「(七)

しら梅や棚田の奥のたなはたけ  
 神垣や扇子の上のはつ明り  
 花の坐や祖父とも見へし妾の主  
 暮切てたしかに白し峰の花  
 うぐひすや旅立よしといふ日柄  
 朝靄にまだ啼止ぬ水鶏かな  
 山冷もぬけた日和や霍のひく  
 さえづりや流れは泡となる計  
 日の暮るほど近うなる柳かな  
 入梅ばれやけふの泊りに見ゆる不二  
 長閑さや山もと道にみゆる笠  
 どの家を隣といふやうめの花  
 明月や夜にかたよる汐ぐもり  
 片枝は山の色なり初もみぢ  
 木の葉ちる中や神楽の焚埃り  
 埋火のしらみて近き夜明かな  
 ぬれて来て柴焚添る槽火かな  
 初華に薄曇かゝる高根哉  
 濡色の日にも乾かぬ若葉かな  
 水鳥の追はるゝさまや山のかげ  
 梅提た人も見て行野梅かな  
 降足らぬ雨の上りや夕がすみ  
 明る夜を出て見る花の泊りかな  
 雪のちる中に梅さく山家かな  
 日の昇るあらし見ゆるや飴竹

出雲 一圓  
 鳳吹  
 雲和  
 可夕  
 無比  
 花実  
 五月  
 蛙面水  
 蘭和  
 桃雨  
 秀然  
 蘭忘  
 和遊  
 むら女  
 花暁  
 岐山  
 橋宣  
 其岳  
 梅旦  
 花井  
 汀月  
 楓月  
 自正  
 松嶺  
 光林

「(七)

「(六)

「(七)

おだやかな浪の上なり二ヶ月  
 網すくや芥子四五本を庭ごゝろ  
 打水やあらしになりて竹のゆれ  
 積みすてた石の白さや梅の華  
 松明の灯の送りむかひや御取こし  
 又ひと夜寒き泊りやほとゝぎす  
 聞迄は氣随に居るや郭公  
 月かげの別にもならずうめ柳  
 むつまじう並ぶ親子や櫓の宿  
 屋根ごしに夜も更ゆくや高灯籠  
 鶯はれて松の花ちる日和かな  
 うら盆や掃たてゝある寺の坂  
 立秋の空をうつすや朝の川  
 庵守はいまに昏衣や不如婦  
 名月や梅の照葉の落て来る  
 寒声はやんでまづふく嵐かな  
 絵行器や露の香のある送りもの  
 寐にかへる鴉さわぐや三日の月  
 待宵の雨ひやつくや草の闇  
 さりとては隣も遠し猫の恋  
 風呂敷で夜露をしのぐ月見哉  
 橋越せば隣のむらの柳かな  
 ひとへから先に実になるさくら哉  
 愛相ほど小島へだてゝ初霞  
 明ほのや深山に帰るほとゝぎす

左得 几乙 秋玉 照陽 千海 梅年 蕉圃 吾春 前路 鶯和 鶯川 和年 海隣 一痴 霍栄 竹仙 芦汀 月桂 霜笠 宜及 昇山 雀洲 可笑 石茶 豊竹

「(九)

「(九)

「(十)

これほどの行末も見ぬ羽蟻かな  
 さくらとは頓てわすれて花の雲  
 立ながら茶も手にのせて遠柳  
 岡歩行ふりな見られそ鴛の妻  
 宵真雨ひゞくや奥の持仏まで  
 居酒屋のかしこく出来し枯野哉  
 しら壁やさえた月夜の梅の花  
 はるゝ雲花待こゝろとゞきしか  
 ひと連に棹ともならず尸帰る  
 年よくて菊も五尺の節句哉  
 捨植のきく面白し遅う咲  
 咲たのを上手にきりぬけしの華  
 柳の葉をみがくや月の雨ひと夜  
 黄鳥やこれ聞かしの啼返し  
 さのふ迄雪も掃しにすゝ箒  
 からし菜も苔もつ夜ぞ鳴田螺  
 撫るうち眠り臥しけり孕み鹿  
 汲たゆむ間を連のほる小鮎かな  
 所望せし火もなき月の小家哉  
 片うづらなくや百夜の夢のあと  
 啼告る声のしをりや磯千鳥

三竹 青池 京有節 芹舎 梅通 江戸等萩 柔水可大 鼎左 鶯宿 公眠 松隣 其濤 蕉林 桃左 霞遊 桃兮 桃年 閑遊 楨立 一嘯 其山

「(十一)

「(十二)

「(十二)

かゝる雲退く雲はやし後の月  
 貫はれぬまはりや菊の誉過し  
 馬士に道たづぬる雪の山路哉  
 箸置た手に持て出る手鞠かな  
 雨も降とげて見かへる青田哉  
 膝に手を置位あり承和ぎく  
 朝露も氷るばかりぞ菊の花  
 青柳の戸口ならんで夜明かな  
 降はやす夜を寐おしむや月の雨  
 寝て聞ば雨のやうなりちる柳  
 客僧の人数前ある袖みそ哉  
 無事の帰帆つゞくや柳そよ／＼と  
 月みがく雲のはしるや鴈の声  
 乗物に添ふて提ゆく牡丹かな  
 見る人も見らるゝ華のさかり哉  
 開かれぬほど蒼もつ椿かな  
 菊百種香に甲乙はなかりけり  
 入た日のかゞやきさめず秋の海  
 衣更着や鳥のなみだを木の雫  
 得入無上道 速成就仏身  
 月も日も添ふかゞやきや稲の華  
 能伏災風火 普明照世間  
 水にかけ月清らかに澄夜かな  
 侍多千億仏 発大清浄願  
 けふといふけふしる菊のほひ哉

旭石  
 瓢窓（十三）  
 芦半  
 江月  
 井旭  
 芦玉  
 霍江女  
 霍芝  
 露筵  
 香月（十三）  
 湖柳  
 柯雪  
 弁奴  
 綾貫  
 普光坊  
 半山  
 果山  
 梅丸（十三）  
 芦丸  
 一瑩

即事観其音声皆得解脱  
 風たへてさやかなりけり秋の月  
 深入禅定見十方仏  
 夢やゆめ夜長の夢に露の音  
 後当入涅槃 如煙尽燈滅  
 入ゆとる月やしらけて梅の上  
 芭蕉翁 桃青居士  
 晋子其角居士  
 高源朝水居士  
 八千房 舍椀居士  
 騰遊木僊居士  
 蒙光院心月屋烏居士  
 淡叟 江心居士  
 淡雲 其山居士  
 きのふとすぎ、けふとくれ、あすまたしらぬ世の中をたどるまに、  
 いつしかむかしといふもの出来ぬ。いでや、宝曆の半時庵の翁も、  
 栄花の夢破れて既にも、とせの星霜を経。されども一家の風流  
 こゝに絶ず、ことし橡実庵主、追悼の詞筵をひらかる。子も田因（十五）  
 の情をうとふことしかり

肖年（十三）  
 一枝  
 全  
（十四）  
（十四）

宝曆、江戸産、宝井氏。宝永四亥二月晦日没。  
 四十七歳。喜見居士下諱。二本榎上行寺二葬。  
 半時庵淡々翁、浪花産、松井氏。宝曆十一巳  
 十一月二日没。八十八歳。難波瑞電寺二葬。  
 初代八千房舍椀、磯氏。安永六癸  
 八月二日没。七十一歳。同寺二葬。  
 二世八千房院岳、後五竹庵木仙、竹上氏。文化十二  
 亥正月五日没。八十一歳。四天王寺東門清壽院二葬。  
 三世八千坊屋崎、後五竹庵。作州勝山産。石井  
 氏。文政十三寅二月廿四日没。七十三歳。  
 四世八千坊一甫、後淡叟。豊后中津産、津民氏。弘  
 化三年六月十五日没。五十二歳。難波瑞電寺二葬。  
 五世八千坊其山、伊丹産、相馬氏。喜永。  
 七寅正月廿六日没。五十三歳。同寺二葬。  
 六世八千坊青年、浪花産、正木氏。

霜ゆかし杖もてつくる富士の形

幻夢庵主桃雅〔戸標〕〔方盤印〕

〔二十五〕

〔美紙見返し〕

〈付記〉

本稿をなすにあたり、難読箇所に関して、亀澤孝幸氏から御教示を頂きました。記して感謝申し上げます。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・公開に関するプロジェクト」（二〇二二～二〇二四年度、代表・田中則雄）、科学研究費補助金（基盤研究（C）「天保俳諧再評価のための新研究」（研究課題番号 22K00327 代表・伊藤善隆）の研究成果の一部である。

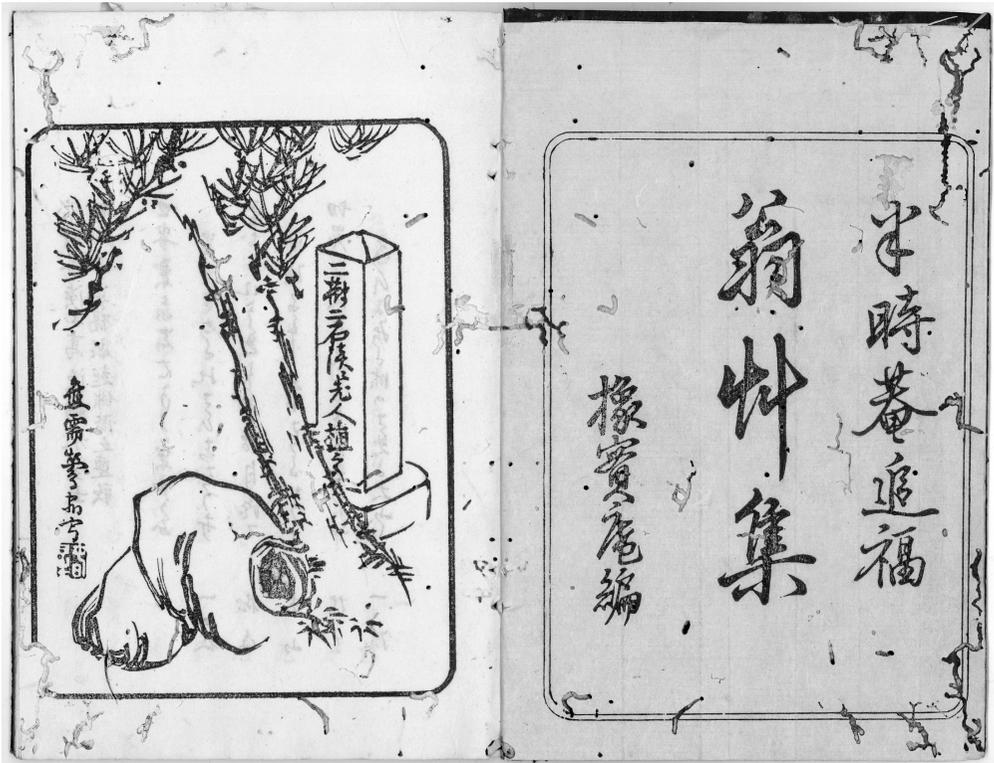
〈参考図版〉

1. 表紙



橡実庵一枝編『翁くさ集』（伊藤善隆）

2. 表紙見返し・「二才」（口絵）





芭蕉翁枕書居士

晋子其角居士  
 高源朝水居士  
 八千房全持居士  
 騰遊木僊居士  
 蒙光院角尾鳥堂  
 淡斐江心居士  
 淡雲其山居士

空室の如くはるかに空しくして  
 早七草の如くはるかに空しくして  
 半藤の如くはるかに空しくして  
 一法八十八の如くはるかに空しくして  
 初六の如くはるかに空しくして  
 一草同寺の如くはるかに空しくして  
 三世の如くはるかに空しくして  
 二世の如くはるかに空しくして  
 四世の如くはるかに空しくして  
 五世の如くはるかに空しくして  
 六世の如くはるかに空しくして  
 七世の如くはるかに空しくして  
 八世の如くはるかに空しくして  
 九世の如くはるかに空しくして  
 十世の如くはるかに空しくして

芭蕉翁の如くはるかに空しくして  
 晋子の如くはるかに空しくして  
 高源朝水の如くはるかに空しくして  
 八千房全持の如くはるかに空しくして  
 騰遊木僊の如くはるかに空しくして  
 蒙光院角尾鳥堂の如くはるかに空しくして  
 淡斐江心の如くはるかに空しくして  
 淡雲其山の如くはるかに空しくして

# The memorial collection tribute to Hanjian-Tantan“Okinagusa-shu” : reprint and introduction

ITO Yoshitaka  
(Rissho University)

## [Abstract]

“Okinagusa-shu” is a memorial collection tribute to Hanjian-Tantan. Isshi, the editor, is presumed to had been a disciple of Hassen-bo, a haikai poet in Osaka. “Okinagusa-shu” is an important collection for understanding the exchanges between haiku poets in the Chugoku region during the Ansei period.

Keywords: Haikai, Tochinomian-Isshi, Shunseido-Oshuku, Genmuan-Toga, Hanjian-Tantan